

# 中国南伝仏教における澆水節の地域的な特徴

鄭 筱 筠 著  
嘉 木 揚 凱 朝 訳

## はじめに

澆水節は、東南アジアの仏教国と中国雲南省における上座仏教を信仰している仏教徒の共通の記念日である。この澆水節は、仏教を伝道することに主たる目的があり、その発展の過程に地域的、民族的特徴が顕われている。しかしながら、現代化と観光行事化などの影響を受けている現代社会では、澆水節は仏教の記念日から世俗化した祭日に変化している。同時に地域的な特徴の変化もあるので、この問題について研究する必要がある。本研究によって澆水節が、中国雲南省で定着し、発展し、変化している状況を把握し理解することができると思う。

## 1. 雲南省における上座仏教がもつ地域的な特徴と民族性

雲南省の上座仏教は、東南アジア上座仏教の影響を深く受けているが、将来された宗派の違いと言語の違いによって、受け入れた文化的影響の度合いとその様式が異なっており、シーサンパンナ（西双版纳）の中心に位置するシーサンパンナおよび思茅地域、徳宏を中心とする地域、臨滄を中心とする地域に分けることができる。

それぞれの地域では上座仏教の伝統を護持する一方で、相当の差異も存在する。主要な差異は制度の面にある。例えば、仏に対する礼拝などの習俗・様式に顕著な差異が認められる。シーサンパンナ・思茅地域では、主に上座仏教の中で潤派を中心とし、古代蘭那王国の法脈を受け継いでいる。従って、制度的な変化は相対的にいえば明らかに単純である。

従来、傣暦の2月の豪幹節には、全比丘は、行政単位である勐ごとに、中心仏寺に集まる。寺内の空地に茅葺きの小屋を建て、十日十夜修行に精進する。午前、初夜、午夜の三時に座禅をする。朝晩は本堂で誦経する。昼、布薩堂に集まってそれぞれに過した全比丘は一列に並んで堂を出て、それぞれ左手に貝葉の団扇を、右手に禅杖を持ち、袈裟を偏袒右肩に掛け、裸足で、胸の前に鉢を持ち、隊列を組んで村へ托鉢に行く。信者は、村の入口で比丘に供養する。これは、全く仏教従来 of 伝統的な僧伽における生活様式を伝えるものであり、シーサンパンナ地域における「潤派」という上座仏教に特有のものであると考えられる。

一方、徳宏を中心とする地域では、四つの仏教の宗派が広まっているために複雑である。四派の中で、摆庄派、多列派および左抵派は、直接にミャンマーから伝えられ、潤派はタイから臨滄江に沿って徳宏地域に伝わった。徳宏地域の潤派の仏教と、殆どシーサンパンナ地域の潤派の仏教と、基本的に同様である。所依の経典はすべてシーサンパンナ文字で書かれており、法要・法事といった仏教行事もシーサンパンナ地域と同じであるが、他の三派、摆庄派、多列派、左抵派所依の経典はすべて徳宏地域の傣文字で書かれている。それぞれの派の戒律によって区別でき、潤派仏教とは、仏教行事でも若干の差異が見られる。

臨滄地域の仏教は、シーサンパンナ地域の仏教と徳宏地域の仏教の中間的な位置にある。両地域の影響を受けながら、歴史的発展の中の過程で本来の土着的な信仰など民族的な特徴も融合している。仏教の行事には、徳宏地域の仏教の特徴があるが、シーサンパンナ地域の特徴も見られる。歴史的には、多列派と左抵派が、ミャンマーから直接伝来したので、ミャンマー仏教流派の特徴が見られる。

## 2. 澆水節の地域的な特徴

澆水節は、上座仏教を信仰している東南アジア仏教国と中国雲南省における仏教徒に共通する祭日で、仏教を伝道することを主目的とするが、明らか

に民族性の違いによる差異があり、地域それぞれに独自の民族性を示している。

「発生学」的観点から見れば、澆水節を記念日とするのは、農耕の祭日であり、また仏教の祭であったものが、やがて民族文化の祭日へと変遷してきたものと考えられる。変遷の過程でこの祭日は一方では中国上座仏教の深い影響を受けながらも、個性的な民族的特徴を有するに至っている。特に、澆水節に関わる伝説故事、行事の内容、儀式それぞれに顕著である。したがってこれらの現象に対して研究を進めることによって、発展し変遷してきた過程を知ることができ、澆水節の変化の有様や特徴を把握できると考える。

雲南省の澆水節は、本来は、傣族の新年行事であったとされる。滇西南地域では6月から10月までは雨季、11月から翌年の1月までは温涼季、2月から5月までは熱季である。自然環境の影響で、滇西南地域に居住している傣族では、収穫の季節は、多くは雨季後の10月からで、収穫し、その後食糧を倉庫に入れる。そのための新しい倉庫は、翌年の2月から3月までに完成するように建てられている。

滇西南地域では、6月が年の第一周期から第二周期に入る季節とされ、傣族は6月を年の初めとしている。そこで、「送旧迎新」が行われる。

シーサンパンナでは、祭日の第一日を、傣語で「宛墨」という。これは中国漢民族の旧暦の春節の晦日に相当する。各家庭で大掃除を行い、買い物をして正月の準備をする。昼にはさまざまなお祝いの行事をする。例えば、賽龍舟、歌舞表演、買い物の交流、赶摆などがあって、「送旧迎新」をする。夜は、映画を放送し、高く放水したりする。

第二日には、「宛恼」という祭がある。「宛恼」は、「空日」という意味で、旧年にも新年にも所属しない「日」とであるとされる。民間では、「悪神頭顱腐爛之日」と呼ばれている。主要な行事は、「澆水」という祭で、今日では、民族文化大遊演と赶摆という祭に変わったとされる。即ち、傣族における風情と習俗に関する大規模な展示活動を指している。

第三日は、「宛帕雅宛瑪」と呼ばれる。この日は「日様」が人間界に来临

する日と考えられている。正月に相当する。本来はこの一日に、堆沙、浴仏、滴水、放高昇、拜年（新年の挨拶）、澆水などが行われるが、今日では、都市で主に新年の挨拶と澆水が行われている。村寨では、昔の伝統習俗をそのまま保持し、その上に音楽歌舞なども加えているとされる。他の地域での澆水節は、傣族文化の影響が大きく、基本的には同様であると考えられている。

### (1) 澆水節の伝説・故事類型の地域的特徴について<sup>(1)</sup>

現在収集することができる澆水節伝説に関する史料の主な出所は、三点である。最初は文章化されて書籍中に収められた文字記録（漢字と傣文で収められたものの二種類がある）、民間の口伝資料から収集されたもの、各地の旅行団体による宣伝資料に載せられた簡単な紹介である。

これまでに収集された澆水節の伝説・各種の異なった故事によって流伝の過程に顕れたものを参照しながら地域的特性を明らかにすることによって、澆水節伝説・故事の主要なテーマの差異の分布を明らかにすることができる。一般的には澆水節の伝説を以下のように分類することができる。

#### [第一類] 季節に関わる伝説と故事——善悪判断しない種類

故事の主題は、明らかに澆水節の伝説と故事の比較的早い時期の作品に属しており、その重要な内容はこの澆水伝説の記述箇所と似通ったところがある。農耕民族としての傣族の歴史文化的な過去を反映する原初的な特徴を持っている。

傣族のこの種の文献に記載された故事は創世史詩である『巴達麻嘎捧尚羅』<sup>(2)</sup>が代表的である。これはシーサンパンナ地域に広く伝わる傣族の創世史詩で、貝葉経に記録され、傣族地域に広く伝承された。その内二つの事節の内容が、澆水節という節日の淵源に触れている。この他に徳宏地域、臨滄地域にも澆水節に関しては、淵源説話と共通する部分を持つ伝説がある。総じてこの類型の伝説は、数量的に最も多く、さらに大部分では文体が素朴で

流暢であり、過度な文飾がない。この類型の伝承は次の要素を備えている。

- ①ある大神が原因で人間界の季節に混乱が生じ、寒暑が定まらず、民が困る。
- ②この問題の解決のために大神が殺される。
- ③大神を殺した人は、彼の実の娘である。
- ④大神を殺す方法は、髪の毛で首を切ることである。
- ⑤大神の死後、頭は地に落ちてすぐ燃えだし、人間に様々な災害をもたらす。
- ⑥娘が順番に父の頭を抱くと、火は再びは燃えない。
- ⑦この女のために水を撒き洗滌する。

このほか各地域では、上述の基本要素に別のプロット、例えば民間の青年が上天の命によって天帝の文で死ぬ<sup>(3)</sup>とか、あるいは天神が青年に変化するとか、「串姑娘」の話形の七女の協力を取り付けるなどの説話が加わるが、基本的な要素は変わらない。

総じていえば、シーサンパンナ地域に流布している傣族の創世史詩『巴達麻嘎捧尚羅』と同じような説話を持つ伝説の中には、登場人物に対する明確な褒貶的傾向は見られない。殺された大神が民間に災いをもたらしても、依然として民間において祭られるし、彼が処罰されたことは、その季節を定める時の誤りであって、民衆の反抗ではない。また同時に故事のプロット中の神を殺した女兒による懲罰もそれほどに厳格ではない。

この故事の成立年代からいえば、これらは比較的古く、傣族稲作文明にある奥深い文化の委曲や特徴を忠実に反映している。また長期に亘る流伝と創造の過程の中で、同様の系統性や理論性、一貫性をもつシナリオを次第に完成してきた。このような故事がシーサンパンナ・思茅地域、臨滄地域の傣族中に流伝し、また徳宏地域の傣族や徳昂族の地域にも伝わっている<sup>(4)</sup>。

#### [第二類] 賭頭（安象頭）の故事の類型

この種の伝説は数が多くない。主に徳宏地域に伝承されている。その中で

整っているものは江応樑氏著の『傣族史』に所収の伝説である。これでは仏祖が暦法を定める伝説に触れている。しかしこの暦法の正確さについて太白金星が疑い、人の頭を賭けて再び新たに暦法を制定したが、失敗に終わった。彼の頭が地に落ちることによって大火が引き起こされ、玉皇大帝は七人の娘を派遣して、順番にかわるがわるこの頭を抱かせた。交替する時に人間界に鮮血が降りかかり災難をもたらすのを避けるために、澆水洗滌しなければならない。この伝説は明らかに仏教と道教との争いを反映しており、争論の結果、仏教が道教に勝ち、道教のもっとも典型的な存在である太白金星が自分の約言を実現しなければならないために負けたら賭けた頭を割るのだという<sup>(5)</sup>。

注目すべきはこの故事がインドの象頭神（ガネーシャ）伝説の流伝を想起させることで、両者の関係は言をまたない。しかしこの故事がかろうじて徳宏地域の傣族の間にだけ伝承されていることは、徳宏地域の歴史上の、宗教が発展するときの複雑な背景、仏教が伝播する過程で発生した他の宗教との争いと融合の状況を読み取ることができる。

### [第三類] 闘魔故事の類型

この類型はシーサンパンナ地域では広範囲に流伝している。臨滄地域ではわずかに見られ、徳宏地域でもけっして拡がっていない。

この故事は魔王と七人の娘の故事及び魔王と七人の妻の故事の二つに分けられる。このうち魔王と七人の娘の故事の方がやや早く成立し、魔王と七人の妻の故事はやや遅れて生まれた。

この伝説は各種の新聞雑誌類、あるいは各種の宣伝資料に散見する。それらの多くは散文の形で表され、文体は精緻でしばしば多くの字数を割いて、人物の形象を描き出している。

その中で代表的なものは『シーサンパンナ傣族民間故事集成』中巻所引の「過節澆水の伝説」である<sup>(6)</sup>。基本は、第一類型の伝説のプロットが発展変化したものであり、その中で最も変化した部分は、

- ①殺された者は神ではなく、悪事の限りを尽くす魔王であり、人々の怨嗟の  
声が道に溢れた。
- ②その娘或いは掠われてきた妻は、民の害を除くために魔王を殺すことを決  
心する。
- ③酒を呑ませて魔王を酔わせ、秘密の情報を得た。
- ④髪の毛を使って魔王を殺し、民の害を除いた。
- ⑤人々は英雄を記念するために毎年澆水節を行った。  
ということである。

これを見ると主要人物の役割が大きく変化しており、それぞれに明確な善悪傾向が現れている。この物語の叙述には歴史文化の中にある正義が必ず邪悪に勝利するという図式をなぞらえる、英雄を宣揚する社会背景があった。ここでは「捧麻点達拉乍」は現世に災禍をもたらす悪神であり、彼の娘たちは人間界のために害を除く英雄である。人は、この七人の娘が大義親を滅し、民の害を除いたことを記念して、毎年澆水節を挙げる。一見するとこの故事は比較的原始的な形態を現しているようだが、その実、大きな文化の感染力によって傣族の生活の中に浸透したことで、結果第一類の伝説と共存する局面を形成し、甚だしきに至っては、時として政府の提唱と宣伝によって主導かつ決定的な地位を持つ権威のあるテキストとなったのである。しかしこのプロットと描写方法から見ると、第一類型の故事との関係は密接であり、この類型は第一類の故事の基礎の上にさらに発展したものというべきである。

これらのことから原始農耕時代は、澆水節の伝説の萌芽があり、伝説の伝承過程で各所の文化的要因の影響によって、伝説は不断に変異せざるを得ず、シーサンパンナ地域の故事類型は節句・暦法を主題とする故事を経て、闘魔を主題とする叙述形式に変遷し、現在広く知られているのは闘魔主題で、思茅地域が代表であり、臨滄地域もこの傾向がある<sup>(7)</sup>が、徳宏地域のみでまだ節句の故事が中心となっている。

## (2) 澆水節の地域的な特徴

雲南省の上座仏教は、はっきりした地域的特徴を持っている。しかし東南アジア諸国の上座仏教と同じく、仏教各宗派の主要な区別は、教学理論の方面になく、むしろ仏教戒律や誦経の声調の差異などにより多くみられる。したがって、雲南省のそれぞれの地域の上座仏教において、その祭節などの仏教の行事では、微細な点で地域的な特徴が現れている。その相違する点は主に仏教行事の内容にあり、澆水節についていえば、採花、行像、浴仏、堆砂などの澆水節の重要な活動に見られる。

### シーサンパンナの場合

シーサンパンナ地域での澆水節は、一般に3日から5日かけて開催される。最初の数日間は、年を送る行事であり、最後の日は、新年を迎える行事となる。この数日間を他の地域と比較して、最も重要な差異は、シーサンパンナ地域にある総仏寺で行われる行像行事と澆水行事にある。

祭の日、シーサンパンナ地域では、(勐腊県であれば傣族の村の青年男女は早朝5時すぎに仏寺に赴いて、仏爺(長老)の念経を聞き、景洪市ではややおくれて仏寺に行くが)村人は全て、必ず沐浴をしなければならず、祭用の盛装(制服)を着て仏寺に灌仏(賤仏)に行く。灌仏の後、仏寺で「堆砂」といって砂で4ないし5基の塔を作る。村人全てが塔を囲んで座り、仏爺の誦経を聞く。その後、既に建てておいた竹屋に仏像を迎え、女性たちは、香花を浸した香水をもって、優しく灌仏する。雲南省では仏を「洗塵」という。仏寺での灌仏を終えると、人々は澆水の遊びを始め、互いに祝福をする。

景洪市の場合は、人々は浴仏の前に「洼竜」総仏寺の仏像をお迎えし、車に載せて供養行事を盛大に催し、「行像」を行う。

かつてのシーサンパンナ地域での最高統治者である「召片領」の管轄地域を練り歩き、大通りをひととおり廻る。沿道の人々は歌と踊りを捧げる。最後に総仏寺に戻り、神聖荘厳な浴仏法会を行う。

## 臨滄地域の事例

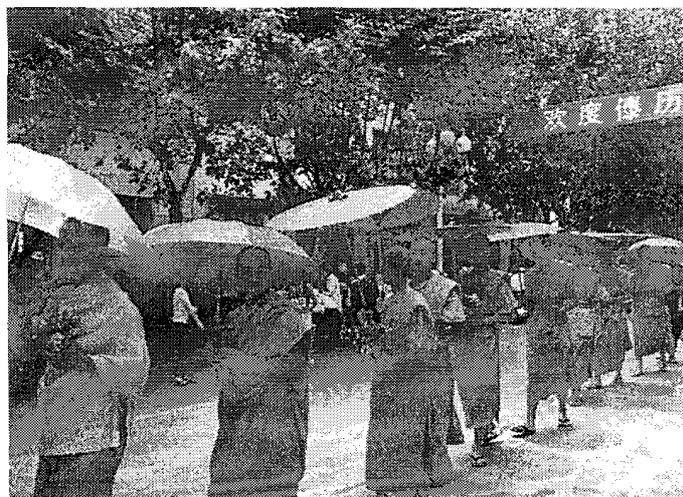
私たちが調査した過程で得たのは、傣族村寨でも、あるいは布朗族や、佤族の村寨でも、擺庄派、潤派、多列派を問わず、それぞれの部族が集落で澆水節を過ごすのに、シーサンパンナ地域の景洪市で行っている澆水節のようには、澆水節の行事として「行像」などの行列を盛大には行っていないことである。しかし、ひとしなみに「採花」や「堆砂」のような行事は盛大に行っている。この地域内で堆砂の行事が行われる時、ある地域では2回行うし、またある地域では一度で済ませるところもある。例えば、滄源県の班老佤族自治郷の佤族は、潤派仏教を信仰しているが、2回の「堆砂」の行事を行っている。最初は、傣族（暦）の新年の第1日（即ち澆水節の第1日）である。これは、旧年の穢れなどを駆除し、新年を迎えるために行う。2回目は、傣族の新年の第3日（澆水節の第3日）である。その時は新年を迎え、幸福と平安を祈願するために行う。しかし、滄源県の勐角の傣族、彝族、佤族の自治郷の人々は同じく潤派仏教を信仰しているが、澆水節の第一日にだけ「堆砂」の行事を行って、旧年を送り新年を迎えてよしとする。

そのほか2007年に調査した結果では、臨滄地域の耿馬県にある総仏寺の僧侶が澆水節の遊行活動に参加する場合、徳宏地域やシーサンパンナ地域と大きく異なっている。耿馬県総持寺の僧侶がまず先頭に立って総持寺を出発し左手に砂を一杯入れた器を持ち、その上に新鮮な花を差し、右手に傘を持ち、一列に並び、後に各村寨の信者宗徒が随行する。群集も年齢の高低に従って、老人と小児を先頭にし、後に年若い女の子と男の子、少女、少年が続く。青年も女性を先に、男性が後になって、全員が砂を一杯入れた器を持ち、その上に新鮮な花を差し、右手に傘を持ち一列に並んで、耿馬県にある一番大きな大青樹が生えている孔雀坡へ向けて出発する。そこで皆は「白象」の到着を待つ。白象の行列が着くと、遊行の人々は、耿馬県総持寺に向けて移動する。白象遊行の行列の人々は道すがら、歌を捧げたり、舞を捧げたりしながら進んでは踊り、踊っては進む。

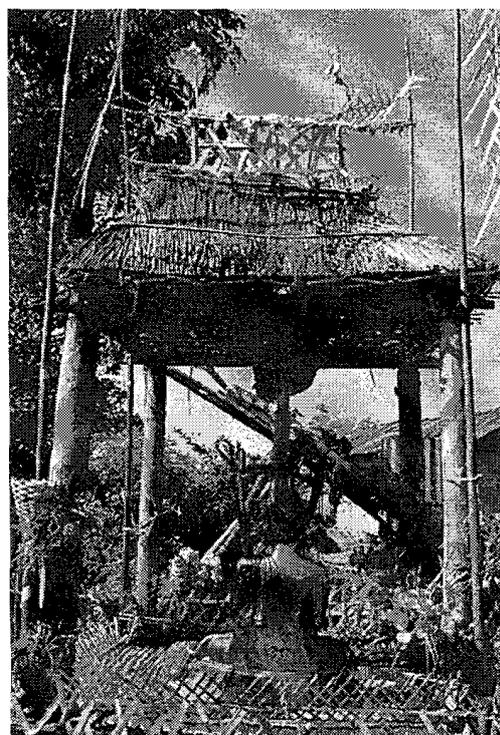
沿道の人々はしきりに行列の人々に手中の水をそっとかける。総持寺に着



浴仏（灌仏）の祭を始める前



臨滄耿馬澆水節傣族僧侶



臨滄地域澆水節浴仏亭

くと人々は持っている砂と花をあらかじめ積んでおいた砂の塔に差し、次に本堂に入って御経を聞き終わると、人々は寺院境内で「白象舞」「馬鹿舞」その他の陽気な民族舞踊を舞う。舞い終わったら、ついで人々は互いに水を掛け合って祝福する。

注意すべきことは、徳宏地域の僧侶は澆水節の行列に参加する時に、帽子をかぶることと傘を持つことを禁じられていることである。これは臨滄地域

と徳宏地域でもっとも異なっているところである。

### 徳宏地域の事例

澆水節には、採花、浴仏、堆砂、澆水を行う。その中で、採花は徳宏地域では他地域と比べて傣暦の新年を過ごす際の最も重要な特色ある行事となる。かつて、澆水節には主に山に登って花を摘み、花の橋を架けた求雨節（採花節とも）と浴仏・灌水（洗仏節とも）の二つの部分から構成されていた。

徳宏地域の傣族は傣暦の新年、即ち澆水節を迎えるに際して、様々な準備をする。掃除して清潔にし、新しい衣服を作ったり、節句に欠かせない食物である「毫悶」（澆水粑粑とも）と黄花御飯を作ったりする。澆水節の二日前、村の老人たちは仏寺の境内にポンプと花亭を造って置く。澆水節の前日の朝、老若男女はグループを作って山に登り採花する。太陽が西に傾いた時、採花人たちは、新鮮な花をかかえて下山する。山に登らなかった人は、銅鑼を叩いたり（敲鑼）、太鼓を鳴らしたり（打鼓）しながら採花人を迎える。人々は歌舞の間に一束一束鮮花を花亭に挿していく。

日照りの年は、澆水節の第一日にも、僧侶が行列に参加するが、シーサンパンナ地域のように仏像を乗せながら歩くことはしない。仏教関係の旗などを持って歩き、帽子と傘は持たないという。何人かの老人が先頭を歩き、「姐借」という下が丸く、両横が羽のような銅片を叩いて歩き、僧侶とともに経を念誦する。それに続いて人々の行列が随行する。女は水桶を担い、男は旗をかついで、青松柏の枝を持ち、花轎を担って運びながら、村寨を巡回し、雨を求めるといふ<sup>(8)</sup>。

澆水節の第一日の朝、各家の老人は鮮花、毫悶、線香、蠟燭などの供養品を捧げ持って仏寺に参拝する。その後、うやうやしく運んできた漢白玉の小仏をポンプの蛇口の四角に、絹織物で縫い上げた方形の枕を置いてその上に置く。その時人々は花亭を囲んで礼拝し、長老の誦経を聞く。午前11時頃、青年男子は、あらかじめ寺内にいて銅鑼を叩き太鼓を鳴らしはじめ、僧侶の

誦経が終わるのを待つ。老若男女は集まり一列に並んで、鮮花を入れた清水を取り出し、木棚に乗り、清水を竜型タンクに入れる。竜の頸を通して、竜の口から流れ出る。構造としては上に向けて開かれた竜の口の中には垂直に立たせた一本の鉄管があり、上部には輪状に小管がはめられて、それぞれの小管には多くの穴がある。大きな管の水は、小さな管に流れ、輪を回転させる。噴出した清水は転盤上に彫られた仏像の上に降りかかる（雲南省では「仏洗塵」と呼ばれる）。他に信徒はこの水で目を洗い、「心明眼亮」を求め、病難を避ける。続けて人々は老人のために洗塵し、老人の幸福と長寿を祈願する。若者は男女とも、水竜亭を出て、その周辺でお互いに澆水をしながら遊ぶ。その後四方八方の道に出て人々に澆水し、祝福し、災いを消し病を避けようと祈願する。

第二日と第三日は、各村で、甲村は乙村にいったり澆水して祝福し、乙村は甲村にいったり祝福し澆水する。澆水の行列は整然としていて順序がある。先頭は鼓楽隊、すぐ近くに儀仗隊と澆水に参加する老若男女となる。澆水に先立って、相手の村寨の仏教寺院に行き仏像と仏塔に礼拝してから、清水を竜型タンクに入れ、灌仏し、それから人々は互いに澆水しながら祝福する。

三日間の澆水節後もしばらく澆水が続くという。民間では、「三天大澆、七天小澆」（三日間は盛大な澆水、七日間は小規模な澆水）という諺がある。

ただし注目すべきことは、徳宏地域では、澆水節の期間にもっぱら盛大な堆沙行事を行う日がないようだが、その実彼等にはもっぱら堆沙行事を行う日がある。

傣暦の一月十五日（旧暦十月十五日）、徳宏地域では「堆沙塔」の行事が行われる。傣語で「広母賽」という。村の老若男女は、川原の砂を運び、老女が仏寺で心をこめて「砂塔」を造る。あるものは節沙、あるものは白粘土を加え、またあるものはいくつかのセメントで造った塔の土台を持ってくる。塔の基部に沿って白粘土を塗る。さらに白粘土で約1 mの塔一つと、底部の周囲約3 mの主塔を造る。四角には小塔を四基つくり、それから細かい砂をまく。それから仏壇の中心に十字の走道を作り、地面を四分割する。老

翁たちは、竹で彩紙の塔帽を造る。老女は先に塔の形を取って用意した約30cmの筍の皮に、濡らした細砂を入れ、馬歯石類の小さな卵形の石やニッケル硬貨を塔心に入れ、四面で合わせて一千の小砂塔を造る。数がそろったら老人の男女は、協力して主塔に塔帽をかぶせ、籬で諸塔を囲う正方形の壁を造り、主塔の中央と籬の四角の柱に五彩紙旗を掛ける。それぞれの籬の四本の柱に芭蕉樹と葉のついた甘蔗を一本ずつつける。それは、収穫と幸せな生活を象徴している。同時に竹でできた皿で糖果米花（ポン菓子）を御供えする。準備ができたら老女は主塔の仏壇に置かれた四香油の灯明に火を点け、それから門を閉じて、会場を封鎖する。籬にいくらかの竹槽を置き、人々が火を点ける蠟燭と、焼香に用いる香を備える。全て整ったら長老たちに誦経を始めてもらう。

夜になると、象脚鼓の音が雷のように大きく鳴り響き、人々は塔を中心として「翩翩起舞」というひらひら飛び回る踊りを踊る。三日にわたって村寨の全ての人々が仏寺で過ごす。毎朝毎晩、寺院の全僧侶が、沙塔で凡そ30分の誦経をする。第三日の午後に、沙塔を片付けた後、子どもたちは、塔心に入れられていた硬貨を貰って縁起物にする。

### 3. 当代における澆水節の地域的な特徴の変遷

澆水節はその発展過程で、早くに農耕の祭日から仏教の祭日に変遷し、その中では、仏教儀礼の実行が最も重要な構成要素になった。しかし現代化と観光産業の深い影響を受ける現代社会にあっては、澆水節は宗教の祭日として世俗化の歩調を次第に早めている。伝統的文化は、その消滅を防ごうとする場合を除いて、宗教儀礼の象徴的な意義が薄まっていくが、澆水節は祭日と儀式の性質について、その元来有する宗教的特徴が日ごとに薄まり、そのために民族的なあるいは世俗的な祭日儀式との境界が日ごとに分かちがたくなっている。だから澆水節を体系的に研究するためには、仏教の儀式などの変遷と現代仏教の発展変化とを明らかにすることが助けになる。現代の澆水節の地域的特徴の変化は主に以下のいくつかの形で現れている。

- (1) 儀式は娛神型（舞神型）から娛神型（舞人型）に変化し、仏教における神聖性質特徴は、弱くなっている。

澆水節の期間中の「行像」という行事は、シーサンパンナ地域と他の地域とを比べた時に一つの大きな特色があった。しかし、最近の行事では、都市の澆水節における行像という行事は、その地位が低くなりうすまっている。「行像」は依然として保存されているようだが、全民族文化大遊演隊の一部分しか占めておらず、原初の聖なる偉大さを感じることは大変難しくなっている。

この変化が近年に現れたものであることは、二種類の『西双版纳報』中の澆水節に関する行事報道についてみれば見出すことができる。

シーサンパンナ地域の全行列隊は合わせて三隊に分けることができる。一は傣族伝統文化の行列、二は民族芸術文化の行列、三は民族民間伝統文化の行列である。

仏教的色彩を持つ「小和尚隊、捧仏隊」は傣族伝統文化の行列の中に組み入れられ、傣拳隊、民族音楽隊、傣族丢包隊、花腰女表演隊、傣族表演隊、民間動物表演隊、竹竿木偶表演隊、葫芦絲表演隊と一緒に傣族伝統文化隊に入っている。仏教文化としての「行像」という行列は、その意義が薄れている。歴史的な仏教文化の「行像」は、だんだん人々に忘れられてしまうのだろうか。その神聖な権威は全行列中で十分に表現されていない。仏教の「行像」の時神聖性も次第に姿を消している。この民族文化的一大ページェントに表現された仏教行事「行像」の歴史も時を経るごとに知る人いなくなり、伝統仏教の「行像」行事は民族文化大遊演へと変化していると考えられる。

澆水節は、シーサンパンナ地域で既に農耕民俗的な色彩と仏教的な色彩を持つ祭日としての行事から、次第に大衆に迎合する観光文化へと展覧し始めており、これによってシーサンパンナ地域の経済の発展を促進するための文化産業となっている。このように転換してきていることを、筆者は、2003年から2008年まで五年にわたって行った現地調査で詳細に記録してきた。澆水節のように、仏教の特色があり、民族文化の特色がある双重性を特徴と

する祭日行事は、今日では、政府が、民族文化の特色を生かそうと計画している中で、ひっそりと変化が発生しており、宗教性が未だ全て無くなったわけではないようだが、漸次弱まっている。

## (2) 澆水節における流行の受容と地域的差異の漸減

筆者が2007年4月臨滄地域の孟定鎮で調査した際に、村の人々は、澆水節の行事の中でインドの腹舞踊を初めて行い、大変人気があった。インドの舞踊を踊る人は、各国の民族衣装を着て、インド、パキスタン、ミャンマーなどの舞踊を舞い、観衆の喝采を博した。

一般的に、記念行事の中で、佤族、徳昂族、布朗族、彝族、傣族などの少数民族がそれぞれに持つ独特な舞踊を踊ることは、各民族が兄弟のように睦みあって共存しているという精神的側面が、中国上座仏教信仰地域の特色であることを示している。しかし、民族舞踊以外の外国の舞踊まで行うことは、2007年以前には全くなかったことである。

同時に臨滄地域の孟定鎮では、現代都市化した生活の中で、第一回ミス水娘コンテスト（第一屆水姑娘選美人）の大会を開催した。このような変化はどれも外部でも見られ、臨滄地域では既に流行感覚の内容も交じっている。

シーサンパンナ地域でも、既に流行が変化している。2003年から「民族文化大演出」が新しく増加し始め。2004年「国際美食節」、水幕映画、有名歌手の演奏会などの行事が増加した。また「傣曆1366年新年説暨2004年中国西双版纳国際澆水節」の到来に伴って深い伝統文化を持つ景洪城は大いに賑わい、数万人を超える各民族及び各国の人々が押し寄せ、盛大に祭の期間を過ごした。この年から毎年シーサンパンナ地域では、「澆水節」の行事を積極的に経済発展の機会としている。

例えば、2007年4月、シーサンパンナ州の郵便局は、政府による澆水節の宣伝を契機として開催された「刀美蘭舞踏芸術50周年」の講演を記念し、記念切手帳1000冊を発行した。2007年4月10日、第一回中国普洱茶戦略連合論壇峰会の百年貢茶を迎える儀式が、景洪で行われた。

観光客を呼び込むためにシーサンパンナ地域では、特に澆水節誦経儀式の行事を景洪地域にある「工人文化宮広場」で行い、十七名の仏爺（長老）が誦経し、四度巡回した。誦経の声は美しく天地に充満した。誦経の後、長老たちは、聖なる水を人々に注いで祝福した。人々は合掌し、盛大な澆水節を始め、午前11時半から「波章」（宗教儀式の司会者・導師）が瀾滄江から取ってきた「吉祥水」を文化宮広場に運んだ。十七名の仏爺は、再び「吉祥水」に向かって誦経し祝福した。伝説の七名の娘を演じる七名の傣族の少女は銀鉢に「吉祥水」を取って、両手で州副書記と州長に差し上げた。州長は、「景洪城歡慶傣曆1369新年祝賀澆水行事を開催します」と呼びかけながら、「吉祥水」を人々にかけてという。その直後に、大鼓が打ち鳴らされ、歓声があきたち、「吉祥水」が空一杯撒かれたという。

シーサンパンナ地域の影響で、他の地域でも、傣族の新暦年（澆水節）を迎える祭事を機に観光に生かして経済発展を促進させようとしている。こうした影響で、中国の上座仏教の各地域での差異が小さくなっている。

#### 4. 変化の原因<sup>(9)</sup>

##### (1) 各宗派相互の承認

雲南省の上座仏教の宗派相互での差異は、だんだん減少している。二〇世紀、80年代以降は、相互交流が徐々に密接になっている。今日ではお互いを尊重し、親睦共存するという歴史的な新局面が見られる。摆庄派にしても、摆潤派にしても、摆坝派にしても、摆孫派にしても、多列派にしても、宗派を問わず、相互に団結することに意を用いている。お互いの善所を取り、弱い点を補うと言う方針で、相互に理解し協力し発展しようとしている。形式上は統一を唱え、儀礼上は相互に尊重しあい、一緒に夏安居に入り、一緒に安居を解き、維薩卡（ウエサク）などの重要な祭事を共同で開催し、同じ仏寺で行事を行うことも常となっている。その他お互いに僧侶を派遣して仏教研究会を開催している。例えば、1980年から、徳宏傣族景頗族自治州の州仏教協会は、進洼（関門節）、出洼（開門節）、澆水節などの主要

な仏教行事を統一して開催することを決めた。こうして各宗派には、重要な仏教祭事を共同で開催する動きが形成されている。

## (2) 組織活動の方式

政府部門による組織と管理は、ますます積極的に行われている。地方によっては、政府側が直接に仏教行事を管理している。例えば、郷（日本の郡相当）では、政府が主催し管理することになっている。二〇世紀80年代以来、中国政府の宗教政策と社会経済発展などの影響で、宗教文化と社会経済発展及び、民族文化との関係は密接になっている。宗教行事は、次第に民族文化の祭に転換しており、宗教の色彩を弱めている。政府の関係部門はその地方の経済を発展させる機会として、「文化搭台、経済唱戲」といって、文化を土台にして経済を発展させる役割を担わせ、伝統的な宗教文化祭事の中に、経済を発展させる内容を加えている。澆水節についていえば、澆水節の宗教的特色は失われ、より多く商業的傾向の経済行事が現在の澆水節日程中に盛り込まれている。シーサンパンナ地域では、澆水節の記念行事は、傣暦の暦法によって定められており、毎年、西暦と多少異なっていたが、方便としてシーサンパンナ地域の傣族自治州は、自治州人民大会常任委員会の立法によって、毎年西暦の4月13日から15日を澆水節に決定した。同時に1999年からは、シーサンパンナ地域の傣族園では、「天天歡度澆水節」といって、毎日午後2時半から、時間を限って村の若い男女が、観光客のために澆水節の活動を行うようになった。澆水節は、観光客と観光会社のために、毎年一度だけの傣族の新年を迎える行事という概念を既に失ってしまったといえる。澆水節は、遊びとして文化産品に転換されているように見られる。

## (3) 発展した地域文化の承認と受容

発展している地域の仏教文化は、他地域の人々の学習モデルとなっている。シーサンパンナ地域の仏教の現状は、徳宏地域、思茅地域、臨滄地域と比較して、二〇世紀80年代以後の復興発展の過程で常に好調であった。雲

南省の上座仏教としては常に主導的地位にあり、現代的な通信手段や交通手段の設備が進歩し、各地域との仏教交流はますます盛んになり、様々な交流会などが行われている。仏教行事などのあり方もシーサンパンナ地域の仏教行事を模範としている。地方によっては直接タイやミャンマーの仏教儀式の方法を取り入れて仏教行事を行うところもある。また積極的な政府の潑水節への関与によって、潑水節を商標化し民族文化財として広く宣伝している。特にシーサンパンナ地域では、その積極的な効果が顕れている。昔は、歴史的な要因と宗派の相違によって、潑水節の行事も異なっていたが、今日では、民族文化として、徐々にシーサンパンナ地域の仏教文化を模範として行われるようになって来ている。こうした影響で、仏教文化も民族文化財として世俗的商品に転換されて、その差異は、だんだん無くなってきている。

## おわりに

潑水節は東南アジア仏教国と中国雲南省の上座仏教を信仰している仏教との共通の祭日である。この潑水節は、主に仏教を伝道することが目的である。その発展過程の中で、明らかに地域的な民族的な特徴を顕している。しかし、現代化と観光行事化を反映する現代の社会では、潑水節は、純粋な仏教の祭日法会から世俗的な祭りへと進んでいるように思われる。同時に地域的な特徴も大きく変化しているように思える。潑水節は、雲南省の上座仏教を信仰する地域では、農耕民俗の様相と仏教行事的様相を持つ祭祀行事から、人々に迎合する大衆化した観光業事へと次第に変化している。経済発展によって起こる文化産業とその商品化、世俗化の特徴によって、地域間の差は小さくなっているように見える。このような現象が、人々の注目や関心に値することは疑うべくもない。

## 注

- (1) 詳しくは別稿鄭筱筠『潑水節伝説各種異体故事及其関係』（未刊）。

- (2) 附録1。
- (3) 『西双版纳傣族民間故事集成』, 雲南人民出版社1993年版, 39頁。
- (4) 「瑞麗德昂族『澆水節与節令的由来』」, 『山茶』1986年第三期第41-43頁(附録2)。この伝説はミャンマーの德昂族にも見られる。
- (5) 江応樑著『傣族史』四川民族出版社, 1984年版540頁。
- (6) 前出『西双版纳傣族民間故事集成』, 43頁。
- (7) 筆者が2007年に臨滄耿馬総仏事の調査をした時には, この故事を本堂外側の壁に画いてあった。2006年以前はなかった。
- (8) 劉揚武「德宏小乘仏教的教派和宗教節日」『貝葉文化論』雲南人民出版社, 1991年版430頁。
- (9) 地域的な変化の特徴について, 筆者は別の論文で説明した。

#### 〈附録1〉

##### 創世史詩《巴達麻嘎棒尚羅》を代表する説話\*

創世の初め, 天と地が既に形成された時, ただ, 四季と日月の交替はまだなかった。天神麻棒摩遠冉(第一大神, 以下麻棒天王)は, 棒摩遠冉(第二大神)を派遣して, 定天柱(頂天柱とも)の上空に登り, この柱をめぐるように太陽の軌道を描かせた。棒摩遠冉が描き出したのは, まさに黄道の軌道であった。彼は1年を12ヶ月と定め毎月30日(大層均等である)とし, また, 黄道の上に十二宮を設けた(これが十二支を表し, 12星座命名法にも相似する)。宮ごとにそれぞれ図を描いた。このようにして, 日と月の運行の道筋を規定した。麻棒天王は棒摩遠冉がこれらの仕事を終えたらすぐに戻らせた。しかし, 棒摩遠冉は自分が成し遂げた偉業に大変満足していたから, 戻って報告しなかった。逆に, 意気揚々と第三の天界(達瓦丁洒という)に遊びに行った。この天界の王の名は叭英という。麻棒天王は棒摩遠冉が何日経っても戻ってこず, くわえて軌道がどのように描かれたかわからなかったために, 別の天神である棒摩腊哈南羅を派遣し, 彼を探しに行かせた。

棒摩腊哈南羅は, 頂天柱の上に到着したが, 棒摩遠冉はそこにいなかった。年月日の分け方を委しく調べたら, 日と月は一見規定の通りに運行しているようだが, 定めた規定に問題が見つかった。つまり毎月30日とするのは, 適当でなく, 長短がなければならない。そうでないと年中の暑い日と寒い日とが均等に分けられてしまう。季節の別がないのである。一日の時間も分けていなかった。棒摩腊哈南羅は戻って棒摩遠冉を探した。なんともはや棒摩遠冉は, 第三天界で遊んでおり, 驕り高ぶって不遜な態度で自画自賛して得意になっていた。

棒摩腊哈南羅が, 自ら観察した結論を棒摩遠冉に告げたため, 棒摩遠冉は激怒し,

自分の分け方に問題はないと言い張り、「御前は何者だ。私は第二天王だが、麻棒天王の命令で軌道を定めた。誰かが私の定めた軌道を改変しようとしたら、必ずひどい目に遭うぞ。」と言った。棒摩腊哈南羅は仕方がなく、麻棒天王にその由を報告し、「棒摩遠冉がいる限り、私は軌道の不足を正確に直すことができない。」といった。そこで麻棒天王は、全人類のことを考えて、季節を調整することにした。

棒摩遠冉を十万年の間、窒息させた（彼を眠らせる。人と同じように動きを止めるが決して死にはしない）。麻棒天王が呪文を唱えると、達瓦丁洒にいた棒摩遠冉は突然倒れ、一本の「哀先遺棒」になり（死んではいるが肉体は腐らず、死後硬直もない）、叭英宮で横たわっていた。彼の体は干からびているが、腐らない。

とても恐ろしいので、この天界の天神は、麻棒天王が知らないうちに、彼を担ぎ出し、頂天柱の平台から人間界に落とすとした。しかし、棒摩遠冉は神力があるから、また宮殿に押し戻されて横たわり、これ以上人間界に落とすことができなくなってしまい、宮殿の大門に鍵を掛け、彼をしばらくそこに寝かしておくしかなかった。こうして天宮は大変な混乱に落ちた。

こうした時、叭英は、棒摩遠冉には溺愛していた七人の娘がいることを思いだした。棒摩遠冉はどんなことでも必ず娘たちに話すから、彼女たちは絶対に棒摩遠冉の秘密を知っているはずである。叭英はいろいろな方法を考えて、七人の娘たちを呼び寄せた。彼女たちを誉めていった。「あなたたちが来て達瓦丁洒の全ての樹木の葉は光彩に囲まれている。昼も夜も小魚が水を注視するように、あなたたちの姿を見ると、あなたたちはとても綺麗で、前からあなたたちを娶って妻（貴妃）にしたいと考えていた。しかし今、非常に面倒なことがある。あなたたちの父親は死んでしまった。彼を盛大に記念するために、私たちは彼を人間に落とすとした。しかし落としてもまた天界に舞い戻ってしまう。あなたたちは最高の天界から下りてきた仙女であるから、きっとすぐれた対策があるはずだ。」と。

父親が死んだことを聞いて、七仙女はとても悲しかった。（父親が年月日を定めるために出発した次の日、七仙女の天界の寿命は既に十億年三ヶ月に達し、天界にいる期限が来ていた。叭英に達瓦丁洒に呼ばれた時点では、父親が死んだことを知らず、突然の訃報を聞いて、とても悲しかった。）

しかし、七仙女はちょっと考えて、叭英の貴妃になれることに思い至り、大いに喜んだ。七仙女は実はとても欲深く、贅沢な暮らしを望んでいたし、叭英が彼女たちを娶って貴妃にしてくれるから、父親の秘密を叭英に教えて言うことには、「天界では天王以外は、誰も父親を殺すことができない。たとえ神刀、神斧、天雷、神箭、神薬などを使っても殺すことはできない。今のところは父親は死んでいないが、（いかにしてその死体を始末すればよいのか。）私たち七姉妹だけが父親を殺すことができる。私たちはそれぞれ一人一本自分の髪の毛を抜き、それで弓の弦を作り、この弓で切り

さえすれば、絶対に父親を殺すことができる（彼の頭を切る）。」と。

叭英はすぐ、「愛しい人よ。あなたたちは今既に私の貴妃であるから、早く髪の毛を抜こうではないか。」といった。こうして彼女たちは、髪の毛を抜いて狩神宮の唯羅塔に捧げた。唯羅塔は、弓を造ることができた。

唯羅塔は大火が天地を毀壊するときに、天地を鎮定し、大地が海洋に埋没されないようにする力を持つ大象であった。叭英は、大火が天地を破壊する時に唯羅塔の功労を思い、彼を達瓦丁洒に救い、宮殿を与えた。このことがあったから、唯羅塔は大変に叭英に感謝し、恩を返したいと思っていた。叭英は棒摩遠冉の死体を処理したとしても、叭英の法力では勝つことができないことを聞いて、唯羅塔はすぐ弓を作った。こうして七姉妹の一番上の姉は牛に乗って嫁いでいった。その日はちょうど彼女の誕生日であったので、天仙たちは皆、彼女を祝福した。「公主様、あなたが弓を持っているのは、災難を射落とす、達瓦丁洒天界と人間界に幸福を与えるではありませんか。」と尋ねたという。皆の話は長女の心を揺り動かした。「災難を壊すどころか、自分の父親を殺しに行くのだ。牛に乗って宮殿の入口に着いて、父親が安穩に寝ているのを見た時、長女は父親を殺すことができなくなった。二番目の姉も象に乗って言ったが父が寝ているのを見てまた帰ってきてしまった。三、四、五、六番目の娘も同じだった。七番目の娘は上の六人の姉が誰も父親を殺すことができず失敗したことを見て、大変喜んだ。彼女は勝手に自分一人が叭英の貴妃になれると思った。彼女は悪魔に乗って父親の所に攻め入った。甲高い声で叫び、弓を引き、父親の頭を切った。七仙女は父親の頭に異常な火があることを説明しなかった。だから、彼の頭が地に落ちたとたん大火が燃え上がり、全ての天堂を損壊した。海に落ちれば、落ちた海の水を全て蒸発させ、若し人間界に落ちたら全ての人間を消滅させる。そこですぐ父親の頭を抱き、人間界に落ちないようにした。父親の体からは鮮血が流れ、熱くて我慢できない。また頭から火気を出していて、達瓦丁洒の天神たちは、大変恐がり、七仙女に命じて、早くその頭を戻すように言った。しかしどうしても戻すことができなかった。大勢の天神が助けても、その頭を戻すことはできなかった。棒摩遠冉の死体は、あちこち歩いたり、寝たりした。

叭英は七仙女を罵って、「どうしてあなたたちの父親の秘密を私に教えてくれなかったのか。あなたたちは、あなたたちの髪の毛だけで彼の頭を切れると言った。どうして彼の頭から火が出ると言わなかったのか。どうすれば彼の頭をつなぐことができるのか。」と尋ねた。

七仙女は、「方法はない。今ただ一つの方法は、天人を人間界に遣わして、頭が北向きの動物の頭を切って持ってくることだ。」といった。（なぜならば、父親が寝る時は、北向きに寝るからである。）

こうして、叭英は唯羅塔を人間界に派遣した。唯羅塔は森林で一頭の大象を見つけ

た。それは頭を北に向けており、体も北に向いていた。そこで唯羅塔が宝剣をかかげて、「カチャ」と一声いうと、象の頭が落ちた。その後すぐに天界に戻って、棒摩遠冉の体につないだが、全く縫いあとはなかった。象頭は目をパチパチし始め、一人の棒摩難（つまり、象頭神、象頭人身）となった。棒摩遠冉は昔のことを全て忘れてしまった。さらに天下のことを管理していることも忘れてしまった。叭英は彼を達瓦丁洒で平穩に暮らさせ十億年の寿命まで過ごさせた。

麻棒天王が来て、今度の事件のいきさつを具さに分析して、「私は棒摩遠冉を十万年窒息させただけなのに、叭英が第二天神の頭を切って、象の頭を接いだと言うことは、神を侮辱し、天界の法を犯している。天地がこれを許さない。」と審判を下し、叭英は天の神官にふさわしくないとして、天神に命じて天界から大海に落とした。叭英は帕雅納（龍王）に成った。それから海には竜王が住むようになった。帕雅納は麻棒天王の審判を不服に思っ、毎年新年の度に天兵、天将を率いて天宮を攻めた。

七仙女の罪悪は最大であり、店員の良心をなくし、貪欲で淫乱であり、贅沢な生活を猥りに願って、人間の感情を失って、実の父親の頭を切るという罪によって、天界にも人間界にも居られなくなって、七人で交代して、一人が一年間必ず父親の頭を持つようになった。交代する時は澆水して温度を下げ、父親の頭の火を消すことができれば罪をあがなえると考えた。だから天宮では毎年澆水し、それに従って人間界でも澆水するようになった。この習慣が今日まで続いている。

\* 岩温編訳『巴塔麻嘎棒尚羅』最後章「開天闢地」、雲南人民出版社、1985年5月。

## 〈附録2〉

瑞麗徳昂族の澆水節に関わる伝説\*は以下の通りである。

未開時代、火が大地を焼き、天上の八天神は泥土が焼けるよい香りを嗅ぎつけて、かぐわしい土を食べるために地上に飛来した。そのうち四人の天神を威哈木、他の四人の天神を那坡と言う。威哈木たちは少しだけ食べて、また天上に飛び去った。残った那坡たちは食べ過ぎたために、飛ぶことができなくなり、人間の家に留まってとても苦難に満ちた生活を送った。四人の威哈木は仲間にも少しも良い暮らしをさせるため、季節を作り出し、那坡には季節に従って労働させることにした。威哈木は1年を四つの季節、寒い日を四ヶ月、暑い日を四ヶ月、雨の日を四ヶ月、時に曇り時に晴れ時に寒く時に熱い月を四ヶ月に分けた。それから、天王は彼らをそこにやり那坡と話し合わせ、言うことには「どれかのきまりが不適切なら、そいつの頭をたたき落としてやろう」と。四人の那坡は暦法のどれもが不都合だと考えたが、威哈木は納得せず、双方の口論は止まらなかった。天王が先に試行させてみたところ、果せるかな不

具合が生じた。天王は威哈木の頭をたたき落とした。しかし威哈木の神通力は大変大きく、彼らを殺せる者はいなかった。天王は彼らの妻だけが彼らを殺せる事を知り、秘かに妻たちをそそのかして自分たちの夫を殺すようにしむけた。威哈木の妻たちは夫の七本の頭髪を抜き去り一本の縄に撚り合わせて夫を絞め殺した。それでも威哈木の頭が地面にぶつかるそこで噴火が生じるので、この妻たちは順番に夫の首を抱いているしかなく、それぞれ一人が一日、十二日で一めぐりさせた。この頭が再び噴火することがないように、彼らは水牛・象・龍と猿の頭をたたき落とし、四首の動物の頭を夫の首に取り付けた。威哈木はまさに復活した。しかし天王は彼らのたたりを恐れ、花果山の地下、すなわち地獄に追放した。彼らの頭が切り落とされたときに流れた血があまりに多かったので、天王は彼らの妻に首の血を洗い落とさせた。人々は、威哈木は間違いを犯したが、むしろ人々の為に死んだと考え、毎年清明節後七日間を彼らの血を洗い落とす日にあて、吉祥がもたらされるように祈った。これが澆水節の由来である。威哈木の作った暦には不都合があったので、天王が那坡に作らせたところ、果たして大変正確だった。そこで彼らを官に就かせ、一人に月を、一人に太陽を、一人に風雨を、一人に寒暖を管理させた。万事種まき・栽培と刈り入れはすべて彼らによって決められた。人々はこの季節に従って耕作し、毎年豊作であった。

\* 「澆水節与節令的由来」、『山茶』1986年第三期第41-43頁。この伝説はミャンマーの徳昂族にも見られる。